# DHR 人材の養成プログラム

田邊　鉄[*1]
Email: ttanabe@iic.hokudai.ac.jp

*1：北海道大学情報基盤センター

◎Key Words　　中国語学習，人文情報学，高等教育，大学院接続

## 1.　はじめに

人文学にとって，デジタル技術は「研究対象」「研究方法」の両方として重要な意味を持つ。今日の人文学研究者は，好むと好まざるとに関わらず，人をつなぐコミュニケーション手段としてのインターネットをはじめ，思考や人格の記録・複製に道を拓く AI，現実とは何かという問いに対する答えに保留を要求する VR・XR などについて知識を持ち，技術に習熟していなくてはならない。

だが，それで充分と言うわけではない。技術革新は，これまで行ってきた研究が容易になる，というだけではなく，これまで考えもしなかった，新たな研究課題をもたらすからである。例えば「SNS の書き込みから，中国と他地域との交流の実相を探り，可視化する」とか，「中国全土の，地形の変動と地名の変遷を付き合わせて，地名の命名パターンを再評価する」といった挑戦的試みは，デジタル技術の理解なしには思いつくことすら難しいだろう。

著者は中国学研究・教育におけるコンピュータの活用について長年研究・開発に携わってきた。いつの時代もその最前線で活躍するのは，中国文学を専門としつつ，同時に「あらゆる漢字を PC で使う」という PC オタク的な興味も人一倍強い，IT 職人的人材であった。中国学でしか役に立たないような PC 利用が続々と開発されていった。ところが，多漢字が容易に PC で使える今日，AI の利用など“その先”を担い得る人材の養成は，大学の教員構成の変化などによる，世代の断絶もあって，思うように進んでいない。

そこで高等教育における，中国語・中国文化授業によって，「人文情報学研究（DHR）人材」を養成するプログラムを開発する研究を着想した。

## 2.　大学の中国語教育

北海道大学の 1 年生が，1 年間学ぶ，共通教育としての初習外国語の選択必修授業は，年間 60 回，90 時間実施される。中国語教育を最小限しか受けない学生は，ここまでで終わり，ということになる。

### 2.1　外国語の四技能

この授業は，外国語の四技能と言われる，読む・聞くといったインプット系技能と，書く・話すといったアウトプット系技能を，満遍なく，文法シラバスに沿って身につけていく，いわゆる“総合授業”である。近年，初習外国語科目の必修時間数が削減されたこともあり，口頭表現・日常会話を重視し，閲読・作文にはほとんど時間を割かれていない。

立命館大学の木村修平氏は，プロジェクト型英語授業において見出される，従来と異なる新たな四技能を提示している(1)。すなわち“リサーチ”“オーサリング”“コラボレーション”“アウトプット”である。もちろん，初習外国語の入門授業と英語を用いてプロジェクト学習を行うことを，同列で論じることはできないが，四技能を固定的に捉えるのではなく，学ぶ目的・学ぶ内容とともに，時流に応じて相応しいものに変えていくべきだ，という考え方は示唆的である。

本研究では，四技能の枠組みはそのままに，インプット系技能は情報検索（ネットと図書館の利用），アウトプット系技能はマイクロブログ（微博など）やテキストチャット，ビデオのキャプションやナレーションといった，「短文による説明」に重点を置くことを考えた。

### 2.2　新しい語彙

中国は空前の工具書ブーム，データベースブームが続いている。古今のありとあらゆる事象に関する，辞書・用語集・索引・地図・注釈・コーパス等が出版され，また，電子化されるものも増え続けている。現代を対象とした論考を読むときには，新しい学術用語への対応も必要になるが，各分野の最新用語集や新語辞典の類もずいぶん増えている。こうした動きに対して，日本でも『中国語新語辞典』が増えてもよさそうなものだが，10 年前，20 年前，といったものが多く，現代中国を活写する文献やウェブページを解読するには，いささか心許ない。

『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』（漢字文献情報処理研究会編，2021 年）は，紙版の書籍とデジタルリソースの両方を駆使して，目指す情報に到達することを目指して刊行された。具体的な課題をとりあげて，同様の課題を解決するための，資料の選択を，紙とデジタルをまたいで紹介している。現代に関しては，やや情報が薄いが，「〇〇が知りたいとき」のような具体的な課題がはっきりしている場合に役立てることができるだろう。

ネットを中心として流通するスラング，流行語の類は，中国での“オタ活”の隆盛とともに，何冊か語彙集が出版されている。ネットでも紹介されるようになっている。ただ，授業で紹介できるのは，1 回にせいぜい 1 つか 2 つであり，「語彙を増やして話せる言葉を増やす」とは異なるモチベーションを醸成することが課題である。

### 2.3 何のための「中国語」か

1980年代後半から1990年代にかけて，日本で出版された中国語の教科書は，日本人留学生が中国の大学で中国人学生と出会って，という設定が多かった。

中国語を専門としない初習外国語の授業では，もっぱら未知の外国に対して抱くファンタジーだけで，科目への興味をつなぎ止めていたからである。中国語は形態論的には孤立語であり，ラテン系言語の性数格による変化や，日本語のような付属語の活用は基本的にない。難解な発音を理解することと，語彙を増やすことを目指してひたすら練習をする。入門段階のこの単調な練習をクリアするためには，中国語教員の体験の紹介が“面白い話”として効果を発揮する。どちらかといえば，「聞き間違えた」とか，「マナーを知らずに恥をかいた」など，自虐的なネタが受けた。

ところが2000年ごろから，インターネットの爆発的な拡大に伴って，教員の“実体験”までもが「どこかで見聞きした話」の一つ，として消費されるようになり，急速に訴求力を失うこととなった。意識の高い学生の興味は中国について情報を得ることから，日本について発信することに移り，結果，大学のある日本の都市を舞台とした教科書が増えていくことになる。こうした傾向自体は，インバウンドに対する“おもてなし”の強化につながり，望ましいことかもしれないが，言語多様性・文化的寛容性を阻害するような“自国イメージの押し売り”に加担しているとも言える。

常識的な価値から独立に，中国語や中国の文化・社会に対する興味を喚起するような，きっかけを作るための仕組みを，授業に組み込む必要がある。

## 3. 授業での取り組みと効果

以上の考え方をもとに，北海道大学で実施している2つの授業で，以下のような取り組みを行い，その効果について初歩的な分析を行った。

### 3.1 必修クラスでのリファレンス提供

北海道大学の中国語必修クラスは，前期週2回（日本人1・ネイティブ1），後期週1回＋CALL授業1回の構成である。対面授業・オンラインライブ授業・LMSによる問題演習を組み合わせた授業であり，授業に関する情報をLMSに載せれば，大半の学生がきちんと見ている。

この授業では，各文法項目について説明されたウェブページや，中国語の学習方法，辞書の紹介，ウェブリソースへのリンクなどを各回ごとに紹介した。また，翻訳サイト（DeepL）や生成AI（ChatGPT）を用いた訳文の生成方法とその利用方法，中国語の効率的な入力など，PCを使った“チート技”をことあるごとに紹介するようにした。

これらはあえて体系的に取り扱うことはせず，各回の授業で，即効性のある技術や，利便性の高いデータベースなどを，一つ，二つずつ実演して見せて，家に帰ったらためしてみて，と言っただけだった。これは，中国語を学ぶ学生が，さらにコンピュータも「学ばされる」という感覚を持たせないように，また，とにかくその日のうちに，ちょっと試してみて，「ほほう」と関心してもらいたかったからだ。

具体的な成果，と言うには弱いが，文化大革命や，封神演義，中国料理のプレゼンテーションなど，具体的な興味関心の対象を持つ学習者について，授業終了後にしてくる質問が目に見えて増えた。質問の内容は，興味のある分野に関する話が多かったが，中国語の学習内容について，また，どちらにも関係ない生成AIや，プログラミング，時事問題について，雑談をしていくこともあった。

過去の研究によれば，授業の内容自体に関わるかどうかに関係なく，授業について，授業外に学生間でメタなコミュニケーションが生じるような授業は，学習効果が上がりやすいことがわかっている(2)。今回の実践で，教員との間のコミュニケーションはもちろん，個人の調べ学習での「脳内会議」でも，同じような効果が生じることが示唆された。

### 3.2 中国語演習初級

外国語演習は1年生の必修クラスを修了した者や，第3の外国語履修を希望する未修者を対象に，少人数クラスでハイレベルな学習を提供するための授業である。一部の学部のみ選択必修としている。入門・基礎・初級・中級・上級のグレードに分かれていて，1年間必修クラスで学んだ者は，初級を履修するのが原則である。だが，実際は楽に必要単位を充足するために，1年でやったことの繰り返しでしかない入門と基礎を履修する学生が多い。

逆に初級クラス以上は，中国語学習についてある程度意識が高い学生が多い。単位を必要としない4年生や大学院生が受けていることもある。

筆者が実施した授業は，翻訳，音声合成，音声認識，検索など，ネット上で提供されているサービスを駆使して，“自分の興味のある分野のテキストを使って”“楽に，楽しく”中国語を学ぶ，一種のチート技を伝授する授業である。平均10名ほどの履修がある。昨年度の学習内容は概ね以下のとおり。

前半はインプット系技術として，検索エンジン・図書館を使った情報収集の具体的方法を学んだ。また，生成AIで自分に必要な学習コンテンツを作り出すための，プロンプトエンジニアリングを，時間をとってやり込んだ。

後半はアウトプット系技術として，中国の故事成語『愚公移山』のPowerPoint紙芝居作りで，口頭説明するときの文の整理のしかたなどを学んだ。

1学期を通して，日記のつけ方（できるだけ毎日3行日記をつけるよう指示，毎週使えそうな表現を学んだ）と，オタク用語会話として，SNSで見られるネットスラングで，テキストチャットでのやりとりを意識したダイアログを学んだ。

最終的に内容はともかく，“わかったような顔をして”堂々とプレゼンテーションできるようになった。

今後は，よりオタク的に尖った知識の流布につとめ，中国語とコンピュータをシームレスに行き来できるオタクの養成につなげていきたい。

## 参考文献


(1) 木村修平：AI時代の英語教育を考える−機械翻訳などを正課授業に導入してみて−（口頭），e-Learning教育学会第21回研究大会基調講演，2023年3月18日

(2) 田邉鉄・長野督：メタなコミュニケーションによる学習動機の維持について，2008PCカンファレンス論文集，2008年8月